

宮沢賢治と黄瀛

——詩的邂逅の意義——

1

「宮沢賢治（1896生）と黄瀛（1906生）が出会ったのは、賢治の晩年近く、昭和四（1929）年の六月。^{注1}黄瀛が陸軍士官学校の卒業旅行で花巻温泉に宿泊した機会に、上官の許可を得て宮沢家を訪ね、病床にあった宮沢と対面した一度だけである。宮沢三十三歳、黄二十三歳だった。黄自身による回想は、早くに草野心平編『宮沢賢治追悼』（次郎社、1934・1）に載せられた「南京より」があり、その六十二年後、一九九六年に開催された「宮沢賢治国際研究大会」での講演「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」『世界に拡がる宮沢賢治——宮沢賢治国際研究大会記録集

栗原 敦

vol.1』宮沢賢治学会イーハトーブセンター、1997・9）がある。後者の講演については、主催の学会で裏方として私も手伝いをしていたので、講師控え室他で身近に触れることができた氏の、高齢にもかかわらず、実に若々しかった姿が、いままも記憶にあたらしい。

前者によれば、黄瀛は「日本詩人」で佐藤惣之助が『春と修羅』を批評する「以前に私は彼を知つてゐる。」と記している。佐藤の批評とは、大正十三（1924）年十二月号に掲載された「十三年度の詩集」（大正十三年度の意）で、四月刊の『心象スケッチ 春と修羅』（関根書店）を「十三年の最大収穫」と激賞したもの。尾山篤二郎の歌誌「自然」（六月号）での紹介、辻潤のエッセイ「惰眠洞妄語」（『読売新聞』7・23）、地元紙「岩手日報」紅羅字の

評（9・18）に次ぐ言及で、詩壇からの本格的な批評として最初のものだったといつてよい。佐藤のこの批評「以前に」宮沢の存在を知っていると黄が記すのは、まさしく、他人の評に頼ることなく、『心象スケッチ 春と修羅』の宮沢を発見しているという彼の自負を示すものだ。そこには、紛れもなく詩人としての黄の深い共鳴があったのである。うけとめた宮沢の（心象スケッチ）を、黄自身（心象スケッチ）という語そのままで作の詩の中に用いていることからそれは分かる。

二人の対面はそれから五年近く経った一夜のことである。区隊長の許可により、郊外の花巻温泉で「みいんが雀踊」という余興を見る夜、私だけ電車で花巻まで引つかへして宮沢君を訪ねた。」家は、家業の質・古着商を大正十五（1926）年に弟清六が建築金物等を扱う宮沢商會に変えていたが、宮沢は同じ年に花巻農学校の教師を退職して始めた羅須地人協会の農民運動による過労で昭和三（1928）年八月に倒れ、年末から翌年二月頃までの重篤からようやく逃れたばかりの病床にあった。「私はすぐ帰らうと思つたら、弟さん（？）が出てきて、本人が是非とほせといふからと云ふので、宮沢君の病室へはいつた。私達は二人の想像してる個々の二人を先づ話したやうだ。」「五分間だけといふ条件つき」の面会の時間がすぐに

過ぎ、何度も引き留められて「結局半時間も話したやうだ。それも詩の話よりも宗教の話が多かつた。」という。

その宗教の話について、黄は「私は宮沢君をうす暗い病室でにらめ年ら、その実はわからない大宗教の話をきいた。とつ／＼と話す口吻は少し私には恐しかつた。」と記している。

ただ一度の面会から六十七年後、後者の講演では記憶を再現して補うところがあつた。^{注2}「その時の宮沢は病気の關係で体力も非常に衰えて、顔もハンサムじゃなくて少しブスのような顔をしていました。」だが、「詩人としてどうかと思つて見ましたら、宮沢賢治は詩人としての威厳とか美しさを持って」いた、詩の話はあまりしなくても、「心の中で」「君の詩はよい。僕の詩も悪くない」というような感じで会つていたといい、よい詩人の基準は「名前がなくとも」それがその詩人のものと分かるような詩人で、「宮沢の詩は幸いにも名前がなくとも、これは宮沢賢治の詩だ」ということが分かる」ものだと述べて、さらにそのとき話した「宗教」のことに及んでいる。

当時の自身を「私はその頃まだ青年で、いや青年というよりも子供で、よく分かりませんが、とにかく宗教なんかつまらないと思つていました。ですけれど、宮沢が熱心に話しているのを聞いていますと、宮沢は確かに宗教にとて

も期待を持っていた人らしいです。そして、話は田中智学さんの話になって、田中智学さんというのは、私も昔浅草

2

の辺りに下宿した頃は、下町の人が非常に田中さんを尊敬している。そんなものですから、もとより田中智学という人の名前は、多少知っていたものですから、非常に話が弾みました。／私はその頃、宗教はまるでちんぷんかんぷんで何も知りませんが、ただ宗教を大宗教の下で、利用すると言うと変ですが、利用したいと思っっている。」その「大宗教」というのは、日本の各宗派に分かれたり、ただ家の中で仏壇に向かって拜んでいるだけのものでなく、「東南アジアの仏教をちょっと魅力的に見て」、「その宗教をビルマとかベトナムに持って行って、国と国とが仲よくなることに使いたい」というような感じで受けとめている、と黄はいう。

講演の中でのことばのため趣旨がとりにくいところもあり、また黄自身の戦中・戦後を貫く経歴を踏まえて深められた認識の反映も感じられるが、いずれにせよ「南京より」に記されていた「少し私には恐しかった」という言い回しの背景を補って、具体的には田中智学の名をあげた他、分かりにくかった「大宗教」という言葉のニュアンスを解きほぐす手がかりを与えているのだった。

大正十二（1923）年九月一日の関東大震災が与えた打撃、それにつづく復興景気、さらにその後の不況という連鎖によって、都市と農村の格差は一層拡大し、農民の階層分解は見過ごせない状況を呈した。東北農村が抱える深刻な矛盾に立ち向かうために、大正十五（1926）年三月、宮沢賢治は四年三ヶ月勤めた花巻農学校の教諭を退職した。花巻郊外の宮沢家別宅を改装して独居農耕生活を始め、ここを拠点に羅須地人協会を設立する。何らの社会的地位も後ろ盾も持たないひとりの農民として、自分が持っている全ての力を捧げて新しい農村の建設に邁進しようとした。身につけた土壌学、化学、肥料学等の自然科学知識と技術による増産、副業による経済生活の向上、音楽・演劇、芸能といった文化活動などによって、農村を少しでも「明るく」したいと志したのであった。^{注3}

前年、大正十四（1925）年に弟清六が一年志願兵として入営したが、宮沢家の内部では、この次男清六が除隊した後の新しい家業の構想と、長男賢治の転身とを合わせ、微妙かつ真剣な検討が重ねられて行ったのである。兄賢治と弟清六との間、清六と両親との間で少しずつ合意が

形成されたようだが、最終的に父政次郎も容認したと見られる結論は、当時の家族制度の下だが、除隊後の次男清六が家業を新らしくして家に残り、長男賢治は農学校教師の職を辞して、分家除籍などの形は伴わないが、そのまま家を出て農村活動に入る、というものだった。

賢治と入営中の弟清六との間で交わされた相談の様子は、残されたいくつかの清六宛書簡にうかがうことができる。

大正十四年七月二十五日付書簡では、兵営での訓練の大変さを慰労しつつ、将来の構想に期待して「こっちには愉快な仕事がある」とある。大いに二人でやらうでないか。おれたちには力はあるし慾はない。うまく行っても行かなくてもたのしく稼がうでないか。」と言い、青森県の山田野演習廠舎に清六を見舞ったあとの九月二十一日付書簡では、見舞った日の営庭での「寂かな愉悅」を思い出しながら、「いろいろな暗い思想を太陽の下でみんな汗といっしょに昇華させたそのあとのあんな楽しさはわたくしもまた知っています。われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦痛を享樂できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんだと感ずるときはた惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。」と呼びかけている。清六が新しい仕事の企画を賢治に伝えたであろう便りに応えた

十二月一日付書簡では、「仕事の計画はいかにも実務的ではつきりしてゐてひじやうに賛成です。／わたくしも多少見当の付く方面ですから精いっぱいお手伝ひします。お父さんも大へんよるこんでゐます。／恐らくきみはその新鮮な熱情と透明な企画とでわれわれのしばらく寂れた家（わたくしの勝手から起った）をはなばしく楽しくしてくるだらうとおもひます。」と記している。「わたくしの勝手から起った」とは、長男であるのに素直に家業を継ぐこともなく、宮沢家の家政を背負つてもいないという自覚の表現である。

次男ながら実質的に家の跡取りを背負うことになる弟に對して、それを押しつける兄としての濟まなさがにじむ一方、心をひとつにして励まそうとする気持も感じとれるわけだが、いずれにせよ「風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんだと感ずる、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずる」ことの楽しさと正しさに對する思いは、まぎれもなく宮沢自身がその宗教的理念的の原点に見出していた世界観、宇宙意識そのものであり、地上の人間世界の汚れが強いる倫理的な罪障をも洗い清めるべき精神として確信していたものに相違ない。

この世界観・宇宙意識を体現して生きることは、そのままひとつの（行）であり、その場はいわば（修行）の道場

のごときものであるだろう。そうであれば、ここでは、社会的地位や世俗的背景を捨てることが要請されても不思議ではない。しかも、農学校の教師としての経験から、現実の農村の中に本当に受け入れられるためには、自分自身はだかの農民のひとりでなければならぬと痛感していたのである。

それにしても、この時期の東北地方において、ひとりの農民になることは決してたやすいことではなかった。農学校の教え子のひとりに贈ることを想定して書かれた詩篇「告別」(一九二五、一〇、二五の日付がある。「春と修羅第二集」)の中にも、「云はなかつたが、／おれは四月はもう学校に居ないのだ／恐らく暗くけはしいみちをあるくだらう」と、宮沢自身覚悟を示すほどなのであった。

こうした厳しい覚悟の上で始められた独居自炊の開墾生活だが、一応の安定が得られるまでは予想以上の困難がつきまとった。当時、一般の農家では人力による家族労働を前提にしていたから、宮沢が恒常的な協力者を持たずに、単独で農民生活の自立と合わせて稲作肥料設計相談等の奉仕活動まで試みるのは、無謀に近かったのかもしれない。けれども、蔵書やレコードコレクション等を切り売りし、借金までも重ねながらやりくりして、野菜や花を作り、肥料設計相談に応じ、初冬から初春までの農閑期を活用して、

希望者を募ってほぼ十日毎に各種の講習を開催するまでになるのである。内容は、農業に必要な科学知識やエスペラント、農民芸術の講習、副業としての冬期制作品の研究、合奏の練習等であった。^{注4}

とりわけ、稲作の改善のために必要とする肥料設計相談は春の耕作開始に備えて熱心に行った。というのも、当時の岩手地方農業では、最も確実で安定した換金作物に稲以上のものがなかったので、自ずから稲作の増産に目標を定めることに結びついたのである。そして、その実現を裏付ける宮沢自身の盛岡高等農林学校卒業後の研究生時代に行った稗貫郡各地の地質調査の経験、身につけた土壌学、肥料学、化学、植物生理学等の知識とそれを実際に適用する実践的精神とが相俟って、ここにこそ自分を生かす道があると確信したのであったろう。

花巻や近隣の石鳥谷などに無料の肥料設計相談所を開設し、訪れる農民の相談に応じて肥料設計し、要請に応じて出張もした。^{注5}作成した肥料設計書(施肥表)は、昭和二年前半には二千枚を越えたとも伝えられる。この二千枚を越えるという枚数に対して、伝説的な誇張ではないかと疑う発言も見受けるが、田圃一枚に設計書一枚(相談内容により複数枚記入することもあろう)、相談者ひとりで田圃数枚に及ぶのが普通だろうから、印刷した施肥表用紙がそれ

だけ使われたことも十分頷けることなのである。

一方、この間に労働農民党稗和支部を支援し、事務所を借りる仲立ちをし、椅子や謄写版印刷器や金員のカンパなども行っている。労働農民党は、非合法化されていた日本共産党の指導を受けて、合法面での活動を担っていた無産者政党だったが、昭和三年二月の第一回普通選挙に際して、宮沢は羅須地人協会出入りの若い農民を誘って労働農民党候補の演説会場に向いたりもした。労働農民党と日本共産党との関係についても、宮沢はもちろん承知していたはずである。小作人や小自作農への支援として、労働農民党へはほとんどシンパサイザーに近い協力を行ったと見られるが、宮沢の立場と行動は、究極的には、既存の政治団体や信仰団体の一員として行うものではなかった。独自の協会名を与えた「羅須地人協会」は、ひとりの個人としての宮沢の、仮にいえるのであれば、自分が創始者となつて、その後には形作られてゆくべき共同体を望み見つづ模索する実践だったというべきだろう。

無償で行う肥料設計だが、相談する農民の不安を取り除くために、被害が出たら補償するといつて宮沢が責任を持つとうとしたことは関係者の証言があるが、その他に、宮沢自身の詩篇「もうはたらくな」(「春と修羅 第三集」)等の中にも記されている。このようにしても、農村の現実

に対して目に見える変化をもたらすことが出来ないという苦しみや絶望も、「何をやっても間に合はない」(同)等に記されるのである。一方、雨に打たれた稲が立ち直る喜びを示す「和風は河谷いっぱいに吹く」、苦勞にやつれる若者の成長を祈る「(あすこの田はねえ)」などがあり、こういった喜びや希望と、先の苦しみや絶望との間の大きな振幅にこそ、宮沢賢治が立ち向かった困難な現実の奥行きが示されているのである。

昭和三年六月の上京、そして帰郷後のうち続く天候不順に無理を重ね、八月になつてついに過勞から発熱し、実家にて病臥。一旦は軽快の兆しをみせるが、再び病臥、十二月には風邪から急性肺炎となり重篤の状態に至つた。

家を出て農村を明るく、豊かにするための奉仕の生活に入った決意からみれば、無謀に近い無理が身体上の挫折をもたらしたという批評も誘う事態である。宮沢自身も理想に向かう中途に倒れたおのれを再び受けとめてくれる「父母」、「弟」の「恩顧や好意」に包まれながら、激しい自責の念に苦しんでもいたのである(「その恐ろしい黒雲が」「疾中」)。

なお一言すれば、農村での活動について、その困難がもたらす苦しみや絶望を記した詩篇が少なくないゆえに、宮沢の試みが農民の無理解のうちに空しく挫折に終わったと

見なし、さらには宮沢の行為自体を空想的なものに過ぎないかのようには評する向きもあるが、決してそうではなかったことを証す実例がある。それは二〇〇五年になって紹介することができた、阿部晁「家政日誌」(注5に同じ)の昭和三年十一月十二日に見られる次の記事である。この日、阿部のもとに、宮沢賢治の父政次郎より「金員在中書状」が届いたが、その事情は〔備考〕欄に「中根子実行組合外五組合ヨリ令息賢治君病氣見舞トシテ進呈セル金子宮政氏ヨリ謝絶」と記されている。阿部は宮沢政次郎とは心を許した同信の友であり、この当時湯口村村長を務めてもいた人物である。恐らくは、宮沢賢治の農村活動が及んでいた村落の農業実行組織六団体有志が語らって、病に倒れた宮沢に見舞いの金子を贈ったのであって、彼の活動がそれだけの思いを引き出すに至っていたことの確かな証拠なのであった。^{注8}

3

昭和四年六月における黄瀛の宮沢賢治訪問は、今見た病床にあつて、宮沢がかるうじて重篤を脱したばかりの時期にあつてはいたが、一方、この折の黄にとっては詩集『春と修羅』や「銅鑼」に寄せられた作品、草野心平への書簡

などの数少ない情報だけが宮沢を思い描く頼りだっただろう。『春と修羅』を高く評価し、「銅鑼」を発刊するや黄と並んで宮沢を同人に迎えたその草野でさえ、宮沢の生活ぶりを立派な「宮沢農場」でのことと思ひ込み、そこで自分も働かせてもらうつもりになるくらいだったのだから、^{注9}農学校退職後の宮沢の厳しい農村生活、農村活動の実状は、東京の詩人たちの誰一人想像できなかったに違いない。面会がかなったとはいえ、病床で交わした話題以上に、黄がその時に宮沢のそれらを知ることもしなかつた筈である。このことを踏まえれば、対面時までの宮沢賢治と黄瀛が互いのどこに共鳴し、通い合うところを見出したのか、改めて確認してみる必要があるう。

試みに黄の第二詩集『瑞枝』(1934・5、ボン書店)から「朝の展望」^{注10}を見てみよう。作者黄瀛自身と見なしてよい視点人物「僕」のいる場面は寄宿舎、冬のはじめの日曜日の朝。各所に挿入された説明を拾えば、「寄宿舎で一番見晴らしのよい」「二階の室」の「窓をふきながら／春のやうな気分もて／こころしづかにも／日曜の朝の展望をするのだ」ととりまとめられる、全三十行の作品。表題どおり、「朝の展望」を描いたものである。

叙述と話題の展開をたどれば、まず呼びかけ「見給へ」(一行)で始まるが、次行以下、特定の呼びかけ対象者は

描かれないままに終始する（初出副題によれば、捧げられた「中川一政氏」と言うことも出来ようが）。冒頭から十一行目までを引用しよう。

見給へ

砲台の上の空がかつきり晴れて

この日曜の朝のいのりの鐘に

幾人も幾人も

ミツシヨンスクールの生徒が列をなして坂を上る

冬のはじめとは云ひ乍ら

胡藤の疎林に朝鮮鳥が飛びまはり

町の保安隊が一人二人

ねぎと徳利と包とをぶらさげて

丸い姿で胡藤の梢にかくれたり見えたり

あ、朝は実に気もちがい、

「僕」の視覚と聴覚が捉えた光景である。「空」、「砲台」、「朝のいのりの鐘」の音、「列をなして坂を上る」「ミツシヨンスクールの生徒」。「胡藤の疎林」に「朝鮮鳥」、「町の保安隊」の「一人二人」が「梢に」見え隠れする動き。

一見何気ない、ただ見えたままを記したと思われるかもしれないが、なかなかどうして、そうではない。砲台の上

に広がる空の晴れ具合を、晴れる動きと、その結果の鮮やかさにおいて捉えていて（「かつきり」という語もちょっと変わっている。「すつきり」であった場合と比べてみてほしい）、それが三行後の「生徒」の「坂を上る」姿に集約されていく。また、「朝のいのりの鐘に」「生徒」が「上る」のも、「鐘」の音が響く中を上るという説明の言い回しではなくて、「鐘」にに応じてとか、「鐘」と一体になってという感じが強い。つまり、「砲台の上の空」も「いのりの鐘」も何もかもが緊密な背景をなして、「幾人も幾人も」「列をなして坂を上る」「ミツシヨンスクールの生徒」を焦点とした映像的ワンショットになっているのである。

それに続く「朝鮮鳥」の飛ぶ姿、「町の保安隊」の「一人二人」の様子も「疎林に」「かくれたり見えたり」と、後の行で明示される作品内の目撃者（視点人物）「僕」の視座（「梢に」とあるように、二階という高みからの視線の反映も含まれている）に統括されて、その〈感覚〉の表白「あ、朝は実に気もちがい、」という表現に結ばれる。

遡って、「ミツシヨンスクールの生徒」の「列をなして坂を上る」動きのワンショットも、もちろん「僕」の〈感覚〉に集約されるものなのである。つまり、作中の目撃者（＝作品の視点人物「僕」）の〈感覚〉が反応する焦点は、感受者と感受している（見聞きしている）対象とが一体に

なるところとして、見定められている（一部に、第6行のように「冬のはじめとは云ひ乍ら」という説明的言い回しを挟んではいるのだが）。

少し一般化して説明し直してみよう。私たちの意識現象には、存在から意識が発し、知覚が生じ、認識が形成され、感情（情）や意志（志）が整えられ、さらに複雑な人生観や社会観や歴史観を構成させ……、といった過程がある。それを前提にして、たとえば、「感情（情）」を表現する

（叙する）ところに「抒情（叙情）」（ないし抒情詩）を想定すれば、ここ「朝の展望」での焦点は、その「感情（情）」が整えられている層ではなく、それよりも手前に見定められていると認められる。

ことばでまとめられると「実に気もちがい、」となってしまうことになる、この作品冒頭での感受は、「悲しい」とか「嬉しい」といった、世間で出来上がっている既成の「感情」概念のひとつに並ぶような「気持ちよい・感情」なるものを表現しようとしたのではない。存在と意識との関係からいえば、「感情（情）」よりも一歩手前、意識の生まれ出る初発に、より近い層で感受されるものとして認められた、いわば知覚から認識が形成されるあわいに、知覚の主体と対象とが、対象的認識に分化する以前の未分の状態として働いている〈感覚〉を表現しようとしていたので

ある。

このことは、日本の「近代詩」が「現代詩」へと切り替わる変化をはかるメルクマールのひとつにも相当する事象だった。

たとえば、直前の詩人として萩原朔太郎をあげれば、彼は第一詩集『月に吠える』（一九一七年）の「序」において、「詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である。」と断言していた。もちろん、ここでも単純に「感情」がとらえられるといっているのではない。複雑な「感情」の核心をその奥で統括する「神経」の動きに「詩」をなぞらせる重層化が必要とされているくらいだから。しかし、萩原は、生きる意味を見いだせない生存の無意味さの倦怠や不安、それらを他者に理解してもらおうことの困難、他者への伝えがたさからくる近代人の孤独と断絶の恐怖を、「詩の表現の目的」である「人心の内部に顫動する所の感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかんに流路させること」で克服できるものと見なしているのである。

萩原の見解自体、日本近代の詩の自覚の歴史において重大な意義を持つものであったが、いまここでははさておき、少なくとも、黄の詩的表現が生まれ出る次元はすでに萩原の議論する「感情」の「流路」のそれとは異なっている、

ということだけは指摘しておけるだろう。すなわち、詩篇「朝の展望」の続きは、「日曜の朝」の「いつにない陽の流れ」「いつにない部屋の静かさ」が感受され、さらに「この二階の室」から見渡される「海」、「山」、「伊太利のやうなこの町の姿」の展望がとらえられてゆくばかりなのだが、そこには更新された感受性と呼んでもよい、見ることがそのまま感ずることであるような、生き生きとした〈感覚〉の働きのあった。黄の詩に「軽快な律動」(宮川寅雄「瑞枝」の出版にあたって)「詩集『瑞枝』復刻版附録」蒼土舎、昭和五十七年九月)をもたらししているのもこれであろう。

実をいえば、この〈感覚〉の働きこそが、十歳の年長者であった宮沢賢治の『心象スケッチ 春と修羅』における詩的表現ともっとも近接しているところなのだ。

例えば、第一詩集『心象スケッチ 春と修羅』(大正13・4、関根書店)の「雲の信号」の冒頭六行を見てみよう。

あゝいゝな せいせいするな
風が吹くし
農具はびかぴか光つてゐるし
山はぼんやり

岩頸だつて岩鐘だつて

みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ

あたかも、一人称によるただの感想の表白に過ぎないやうに見えるかもしれないが、その実、自己の「せいせいする」気分と「風」、「農具」の輝きと「ぼんやり」する春の「あたたかな」「山」のたたずまい、地質学上の知見をまっぴらに「ゆめ」といふ無限大に近い時間感覚、それらが「ゆめをみてゐる」という擬人化を介した統括によつて全て(「みんな」)緊密に集約されているのである。作品は、このあと「雲の信号」によつて転換がもたらされ、重層的構造を組むことになるが、いまそれはさておくとして、この一人称視点による(心象スケッチ)の実験は、より自覚的なものとして、「わたくしはずるぶんすばやく汽車からおりた」に始まる長詩「小岩井農場」における、半日の徒歩旅行の内界と外界が同時に認識され、表現される、リアルタイムの意識の生成の現場の探究となつて残されることになる。

宮沢の場合は、彼の培ってきた宇宙観(コスモロジー)と人間の意識の内観とが重なるところに、ひとつの実験的意味合いをもつて「心象スケッチ」という認識と表現の方法が模索されたのだが、これを言葉による意識の定着とい

う側面に限定して説明すれば、「知覚の主体と対象とが、対象的認識に分化する以前の未分の状態として働いている〈感覚〉」を表現していたといつて差し支えない。ひるがえってみれば、宮沢と黄との、ふたりの詩人の共鳴・共感の原点はここにこそあったのである。

それゆえ、冒頭に紹介した「日本詩人」で佐藤惣之助が『春と修羅』を批評する「以前に私は彼を知つてゐる。」と記す黄瀛の宮沢との出合いも、この点に関わっていたのだ、そう判断してよい。

注1 岡村民夫によって紹介された「国際シンポジウム 詩人黄瀛と多文化間アイデンティティ」第二日報告資料の「花巻温泉ニュース」第一号（昭和四年七月一五日）所収「温泉たより」「往来」の項、「六月中」の「来泉」修学旅行団の内に「東京陸軍士官学校、支那留学生、」が含まれている。従来、黄の宮沢訪問は彼の回想によって昭和四年「春」とされていたが、「六月」（恐らく月初め、昭和五年七月の「花巻温泉ニュース」第二号に翌年の卒業旅行が五月末から六月にかけてだった記事があることも岡村が紹介している）に訂正される必要がある。

なお、右の記事は岡村「詩人黄瀛の光栄——書簡性と多言語性——」（『言語と文化』第6号、2009・

1) の中でも紹介された。

2 講演は花巻と東京で行われ、ほぼ同じ内容であったが、以下の引用は東京のものによる。

3 農村活動の中断を余儀なくされた病中での書簡下書にあることばだが、「根子では農業わづかばかりの技術や芸術で村が明るくなるかどうかやってみて半途で自分が倒れた訳ですが」（252a 小笠原——当時高瀬——露あて、昭和四年日付不明）と説明している。

4 『新校本宮澤賢治全集』第十四卷「羅須地人協会関係稿」、第十六卷（上）「第十四卷雑纂・補遺」所収（集案内 二）、第十六卷（下）「第十四卷雑纂・補遺」所収（集案内 三）参照。

5 阿部晁は花巻町石神の有力者で浄土真宗の篤信者。賢治父政次郎の知友であるが、その「家政日誌」（栗原敦・杉浦静「阿部晁『家政日誌』による宮沢賢治周辺資料」『宮沢賢治研究 Annual』Vol.15（2005・3）昭和三年三月二七日の「文書・発」の項には「宮沢賢治君ニ来宅肥料設計依頼」とある。

6 『新校本宮澤賢治全集』第十四卷「羅須地人協会関係稿」「施肥表A」の「二八」〜「三二」の五点はどれも鎌田喜兵衛に対して設計したものである。

7 『新校本宮澤賢治全集』第十六卷（下）「年譜」昭和二

年、三年を参照。

8 なお、政次郎が阿部に「金員在中書状」を送ったのは、多分湯口村村長である阿部を通じて、「農業実行組合」に返してもらいう意図によるものだろう。「農業実行組合」の農民たちの見舞いという謝意は受けても、既に一定の資産を形成していた宮沢家として、かの農民たちから「金子」を受けとるべきではない（「謝絶」）、というのが政次郎の信条だったと考えることができる。ここには、無報酬の奉仕として農村活動を行おうとした宮沢賢治と、その父宮沢政次郎との間に通う共通の精神が現れているのだと思う。

9 「賢治からもらった手紙」（「歷程」昭和四十五年三月）

10 初出は大正一四（一九二五）年二月「日本詩人」、第二回新詩人号の首席当選で、千家元麿の選により、もう一編の「春」とともに掲載された。副題に「——中川一政氏にさ、ぐ——」とあり、末尾に「——一九二四、一一、三〇、礼拝日——」と付記されている。初出と詩集との間には、他にごく小部分の異同が見られる。

付記

2008年10月24日から28日にかけて中国重慶市の四川外語学院東方語学院・四川外語学院日本学研究所の主催で

行われた「国際シンポジウム 詩人黄瀛と多文化間アイデンティティ」にパネリストの一人として参加したが、本稿はその報告集のために書いた文章をもとに、注を付し、若干の手を加えたものである。

（くりはら あつし・実践女子大学教授）